

自転車で GOGO

～学級活動での自転車を使った取り組み～

文・構成 備瀬雄太（神戸大学附属特別支援学校）

はじめに

今回は、特別支援学校の取り組みの中から、自転車を使って取り組む「自転車で GOGO」を紹介します。

配慮を要する点

集団の実態に合わせて、以下の点に配慮する。

- ① エネルギーが豊富な子ども達なので運動量を保障することが必要
- ② それぞれ、活動のペースが違うので、活動の自由度を保障することが大切
- ③ 活動のルールを決める場合はみんなが理解できる「ゆるいルール」が適切
- ④ 生徒それぞれが適度な距離を保つことができる設定が必要
(友だちと近い距離にいることが苦手で、集団での活動に参加が難しい生徒への配慮)

「自転車で GOGO」

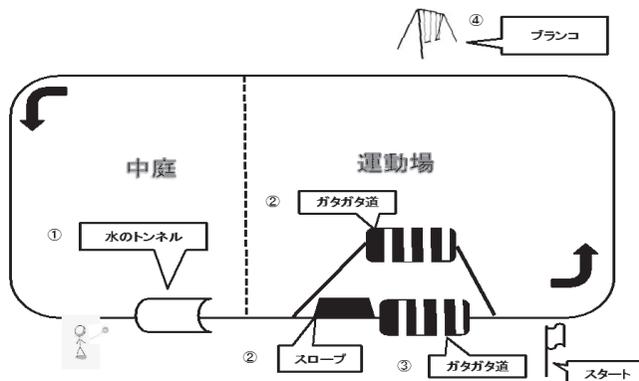
・活動内容

生徒それぞれが自転車に乗り、笛と旗係りの合図でみんな一斉にスタートして、次ページの図のように様々な仕掛けのあるコースを周回し、笛係りの合図で自転車を片付ける。最後は、ブランコやスラッグラインのある場所でのんびりとお茶を飲んで休憩しながら、活動を振り返る。

・「自転車で GOGO」のクラスにとって良い点～クラスの実態と対応させて～

- ① 自転車に乗ってコースを走る活動なので十分に活動量が保障できる。
- ② それぞれが自分自身で自転車を操作してコースを巡るため、スピードも自分で決められるし、途中で休憩することもできる、自由度の高い活動である。
- ③ 活動中でのルールは、「みんなで一斉にスタートしてみんなで一斉に終わる」というクラスのみなが理解できて簡単なものである。
- ④ それぞれが自転車で移動しているため、生徒同士が適度な距離をもって活動することができる。

・コースの紹介



自転車で走るコースは走る気持ちよさを感じられることを追求する。全体としては、自転車が渋滞することなくそれぞれが気持ちの良いスピードで走ることが出来るように、中庭と運動場を使う、全長100m程の長めのコース立てにする。また、自転車を漕ぎ続けることが体力的に難しい生徒や、友だちを乗せて走ることと友だちとの関わりを持ちたい生徒がいたので、友だちや担任との二人乗りも認める。流れとしては、担任も含んだ全員が自転車に乗ってスタート位置に並び、スタート係のフラッグと笛の合図で一斉にスタートをして、図のように様々な仕掛け（詳細は以下を参照）を巡りながら、教師の笛の合図があるまでコースを周回する。なお、スロープを渡るのに時間がかかる生徒もいる場合を考えて、スロープの手前に迂回用の道も用意する。笛の合図で周回を終えた後は、ブランコでゆったりと過ごしながらか授業の振り返りを行うようにする。

①水トンネル



透明のビニールで作ったトンネルを通る際に、教師が水鉄砲で生徒に向かって水をかけるようにする。トンネルがあるので直接、水がかかってしまうことはないがトンネルに水が当たる音が聞こえたり、水が飛んでくる様子が見えたりすることで、ドキドキしながら通過することが出来る。また、水鉄砲の教師との言葉のやりとりも楽しむことが出来る。

②スロープ



木製の緩やかな角度のスロープで、勢いをつけてスロープに入り、下るときの爽快感を味わうことができる。わざと坂にゆっくりと侵入して、精一杯ペダルを踏みしめて登りきることに手応えを感じている生徒もいた。

③ガタガタ道



少しドキドキするけど
楽しみだなあ～

半分に切った塩ビ管をベニヤ板にくくりつけたもの。この上を自転車で走り抜けると、体に伝わる振動を楽しむことができる。写真の生徒(緊張で自転車を漕ぐ私の服を噛んでいる)のようにドキドキして生徒もいるが、そのドキドキが楽しかったようだ。ガタガタという音が心地よく、それを楽しむ生徒もいる。

④ブランコ



自転車を乗り終えた後は、ブランコやベンチのある場所に集合して授業のことを振り返る。教師の話をして聞くということは苦手な生徒達だが、それぞれがリラックスできる場を保障することで楽しく振り返りができる。友だち同士の会話を楽しむことは難しいが、先生をからかって「コラコラ」とブランコを押ししてもらおうというみんなが楽しめる遊びも生まれる。

実際の実践「自転車で GOGO」で見せた生徒の姿 ～ A 君を中心に～

授業の中では、生徒それぞれがコースを気持ちよく走ったり、仕掛けに手応えを感じたりする中で個々の充実をつくることを最も大切にしました。個々の充実がないと友だちへ気持ちを向けたり、集団で楽しい場を共有したりすることはできないと考えたからです。ただ、別々に走る生徒を教師が声かけで繋いだり、友だち同士の2人乗りなどの設定をしたりすることで友だち同士の関わりも少しずつ生まれてきました。中でも、友だちへの関わり方が暴力的であるために避けられがちだった生徒が、友だちにつばをかけるという、普通なら当然嫌がられてしまう行為を「つば爆弾」という楽しい関わりとして友だちに受け入れてもらったことで、クラスの中に楽しいことをする存在として位置づいたことは大きかったです。幅広い認識の生徒の集団では会話など直接的な関わり合いで関係を深めていくことは難しいので、クラス集団をつなぐ上で学級活動の重要性を改めて実感した実践でありました。